子どもの現状と次世代育成について Ⅱ

成　田　朋　子

Ⅰ　はじめに

近年さまざまな場面で「子どもが病んでいる」という言葉が聞かれるが、現在を生きる子どもたちは本当に病んでいるのであろうか、またこの事態に対して我々大人はいかに対処すべきであろうか。

以上のような問題意識から、昨年度、近い将来子どもたちを保育・教育・養育することになるであろう学生たちに「時折、“子どもが病んでいる”という言葉が聞かれますが、あなたはどう思いますか。病んでいるとするならその原因はどこにあると思いますか。また、その状況に対して大人はどのように対処すればよいと思いますか。」と質問し、レポート提出を課した。

学生たちは、現在の子どもたちの状況は病んでいると言わざるをえないが、子どもが病んでいるというよりは、まわりの環境、中でも親が子どもを追い込んでいると感じていた。この状況に対しては、親・大人そして社会を変えていくことの必要性を感じていることもわかった。さらに、社会全体が子どものことをもっと学ぶことが必要であることも指摘されていた[(1)]。

筆者は今年度、現職保育士に同様の問いかけをする機会があり、その結果を手がかりにして、次世代育成における保育所の役割等について考察することとする。

Ⅱ　保育士のレポートから

筆者は2007年度愛知県現任保育士指導者養成研修[(2)]中堅コースにおいて、授業科目「保育所の役割と機能」を担当した。

講義の概要は「少子化が進行し、家庭や地域の養育力が低下している今日、保育所にはその資源を活用した役割がますます期待されている。保育所保育指針の改訂、認定こども園に代表される保育の動向を整理し、今後の保育所のあり方を考え、保育の質の確保・向上のためになすべきことを考えたい。その一つとして実施促進が見込まれる第三者評価についても解説したい。」とした。講義終了時、受講の感想とともに、「近頃さまざまな場面で“子どもが病んでいる”という言葉が聞かれますが、あなたはどう思いますか。病んでいると考えられるならその原因はどこにあると思いますか。またその状況に対して大人はどのように対処すればよいと思いますか。」についてレポート提出を課した。

（1）レポートの結果

受講生72名全員がレポートを提出した。特異な回答はみられなかったので、経験年数を記入した43名分を分析の対象にした。

結果を表に示す。

回答者欄の空白は、無記名回答者であることを示す。

2006年度、学生のレポートを分析する際には、「子どもは病んでいるか否か」、「そう判断した根拠」、「病んでいる原因」、「病んでいる状態に対する対策」毎に作表したが、本稿では、以下の①に述べる理由により、「子どもが病んでいる状態」、「病んでいる原因」、「病んでいる状態に対する対策」毎に作表した。

子どもが病んでいることについての回答

回答者	経験年数（年）	病んでいる状態	原因	対策
	5	・よりどころがない ・心を傷めている子どもが多い	・虐待する親 ・子どもと向き合わない親	・親が子どもに耳を傾ける気持をもつ

			・大人が疲れ、心がすさみ、親として子どもにふれあう機会がない ・子どもも親によりどころを求めなくなっている ・友達いじめ	・保育園で、保護者に対してねぎらいながら、子どもの成長を喜び合える機会をもつ ・愛してるよというメッセージを伝える ・誕生日会など機会を作る ・仲間作りをして、相手の気持に立って考えられる育ちを大切にしていく
ＫＩ	5	・落ち着きがない ・イヤばかり言う ・夜泣き、ぐずりの増加	・自分たちが原因―理由がわからないと、病んでいるとしてしまっている ・家庭の愛情不足や知識のなさ等家庭に原因がある場合もある	・自分のやりたい保育をするのでなく、子どもの姿や思いを受け止めながら保育する ・子どもの全てを丸ごとありのまま受け入れる
ＭＮ	8	・気になる子が増加している ・すぐ疲れると言う、外遊びを好まない、人とのかかわりがうまくできない、表情が乏しい、すぐかっとなり行動に移す等 ・すべてが病んでいるわけではないが、本来の子どもらしさが感じられない	・直接体験の減少 ・実体験としての遊びが減少（テレビ・インターネットの普及による）	・いろいろな体験をさせることが大切 ・子どものできる範囲で体験させる、その中でいろんな感情を抱かせる（感動体験）
	9	・精神面が安定していない ・人とのかかわりが苦手 ・想像力の乏しい子が多い	・幼児期に経験すべきことが習い事にしばられ、気持をおさえつけられている ・人とのかかわりが不足している	・子どもの発達を把握し、経験すべき事が経験できる保育内容を考え、環境を整える ・応答的に対応し、自分の思いを人に伝えること、人の思いを受け入れること、自分で考える力を身につけさせる
	9	・朝ボーっとしている子が多い ・眠ったまま登園する子ども ・月曜日に聞く休み中の話はゲームの話がほとんど ・朝食を食べない ・遅くまで起きている ・両親と思い切りあそんだ経験が少ない		・おたよりで伝える内容を工夫 ・親子参加の行事で一緒に遊ぶことを伝える ・大人が子どものために少しでも生活を改善
	10	（乳児保育園） ・園で話題になる「こどもらしくない」「無気力」が「病んでいる」につながるのだろう	・家庭で何らかの事情 ・愛情不足	・保育士の役割
ＳＧ	11	・子どもたちは根はやさしくて素直：大人が病んでいる	・便利になった世の中で、人工的な環境が多い中で育った親世代が子育てをするため、病んでいるように見えてしまう	・少なくなってきてはいるが失われていない自然を大切に、大人と子どもがともに成長しあう
	12	（10 年前に乱暴な 3 歳児担当） ・病んでいる子はとことん病んでいる	・親が親になりきれていない	・子どもの良い点を伝える ・一緒に育てようという姿勢で保育
	13	・精神面の弱さ ・気持を表すことが苦手	・ゲーム機の普及 ・家庭環境、親子関係	・小さい頃から多くの人に愛情をもらい、人間関係を豊かに

		・高学年になるほど病んでいる子もいる		してあげる
ＩＧ	13	・子どもらしくのびのびできない「ママに叱られる」が口癖の子ども ・「また買えばいいじゃん」と言う子ども	・親子とも幸せのはきちがえ ・親の自己満足 発表会のビデオ：ありのままの姿を見ない	
	13		・今の世の中 ・親が自分一人で子育てをしようとする	
	13		・低年齢から保育所 ・ゆっくりとする時間、かかわる時間がない ・「こどもに手をかける」意味の取り違え：習い事 ・こどもとの約束を破り、自分の都合で子どもを動かす	・子どもたちが十分甘えられるように ・保護者に子どもの良いところを伝えほめてもらう
ＲＨ	14	・心が乾いている ・大人を試す行動が多い ・（年長担任）月曜日、スキンシップを求めてくる ・家でやってもらうべきかかわりを園で発散	・大人の都合で振り回して子どもが本当にしてほしいことを見逃している ・人とのかかわりの中でさびしさを抱えている大人が多い	・園を子どもにも保護者にもほっと一息つける場にしていく ・大人が安定し気持よく過ごす姿を見せる
ＭＫ	14	・不登校児の多さ ・心の弱さ	・母親にとって、仕事の重要度が高くなっている ・我慢する経験が少ない	・母親が働いている間の心の安定を図る ・子育ての悩みをうけとめながら楽しさを伝える ・集団で過ごす楽しさを経験させ、生活の中でルールを身につけさせる
ＭＳ	14	・意欲的で子どもらしい子どももいるが、昔に比して、意欲にかけた子ども、遊べない子どもが多い	・虐待、夜型生活など環境の変化 ・大人が育っていない ・ニート、自己中な考え、望まない妊娠	・低年齢から自分の身を守ることを教える ・社会、近隣との関係を蜜に ・性教育 ・子育て支援 ・保育士、教員増
	14	・精神的、情緒的に病んでいる子どもがクラスにいる	・家庭や親、大人社会が病んでいる ・親の異常な愛情の注ぎ方：子どもを自分の「物」として扱い、思い通りに動かそうとする ・過度の期待、虐待 ・親が病んできたのは、今までの社会やその親に原因	・関係機関が連携してサポート、家庭支援 ・社会全体の意識変革
	15		・原因は子どもではなく、大人が病ませている ・子どもの時期を子どもとして生きることを十分に保障されていないから（保護者の下で安心して養護される、十分な	・社会全体で子どもが子どもらしく生きることを考える ・大人の都合を取り払いじっくり考える

			睡眠、親子で食事、十分な遊び、家族との時間の保障、） ・忙しすぎる大人社会	
	15	・遊べない ・人とのかかわりが乏しい ・心身の発達が未熟	・大人に原因	・親になりきれていない親をどう支援するかを考える ・園は環境構成を整え、子どもの発達を支える
ＭＯ	15	・疲れた表情 ・無表情 ・キレやすい	・長時間預けられて疲れている ・母親も同様表情が少ない	・誰もが同じ位の子どもと交流できる場をつくる ・他保育者と協力して落ち着ける環境づくり
ＭＯ	15	・自分を表現できない ・かかわりが素直にできず誤解され、すねたり、手が出たりする	・親の都合 ・早くからの教育づくし ・便利さ追求	・子どもたちの思いを大切に ・大人の人を大切にする姿を見せる、
	15	・家庭にやすらぎを求められない子 ・キレる子 ・愛情不足	・親になりきれていない親 ・子育てを保育所まかせに	・親が一番に子どもを愛すること、育てることが必要 ・そのために保育士、支援センターが支援
ＲＷ	16	・満たされず愛情を求めている子ども ・いじめ、ニート、虐待	・社会や環境の変化、大人が病んでいる	・社会全体を変える必要があるが、まずは身近な保育の中で子どもに愛情を注ぎ、子育てのサポートを地道にしていく
	16	・妙にべたべた、キレやすい、乱暴、気持をコントロールできない、落ち着かない	・家庭環境 核家族化、就労による忙しさからかまわない、兄弟が少ない、両親の不仲、保護者の意識感覚のずれ等	・１対１のかかわりを大切に ・衝動的になったときは保育士は冷静に、穏やかな口調で諭す ・いつも目をかける
	16	・ゲームにはまる子どもたち	・子ども以上に親もそれらのゲームに夢中になる	・子どもに与えるべきものと与えていけないものの区別をしっかりする
ＹＳ	17	・心、内面の問題を持っている	・これまでの親とのかかわりかた、愛情のかけられ方、気持の受け止められ方：何かが欠けていた	・足りないものを取り戻すために、サインに気づき、内面をより深く知っていく必要
ＳＦ	17	・経験不足、受身な姿が気になる ・遊び込めない、根気がない	・ふれあい、安心感希薄	・子と親に１：１の労力が必要で、保育者が連携、協力し、体制を充実させる
	18	・朝から機嫌が悪い ・すぐキレる ・話が聞けない ・理解ができない	・生活の乱れ、育児放棄 ・大人の勝手や無関心で生活が過ぎている 遅くまでテレビ、ゲーム、一人でビデオ、子どもだけで留守番、朝ごはん食べていない、風呂に入っていない ・親がストレスから怒鳴る、たたく	・子どもの生活を保障する必要 親ができなければ、代わりの人、保育者が愛情をもって接することが大事
ＹＫ	18	・乳児の噛みつき、ひっかきの増加 ・家庭では自分が出せずその分、園で発散する子どもが増加 ―子どもだけでなく保育者にも	・乳児期に必要な経験をしないで育ってきた	・保育所職員全員でフォローしあいながら関わる ・子どもの二面性に気付いてもらえるよう親との信頼関係を築く

		叩く蹴る噛む、止められるとすねて逃げ出す、はさみで部屋中のものを切る ―思い通りにならないとパニックになり、泣き叫び、赤ちゃん返りし、抱っこされて安定する		
	18	・病んでいるというより、遊ばなくなった（遊具がないと遊べない、サッカーボールではサッカーしか遊べない）	・大人が多忙 ・女性の社会進出 ・ゲームの大流行 ・地域の偏り	・保育園時代に遊び込めるように
ＳＨ	19		・家庭環境 ・親の接し方が問題―振り回されている親、自己中で子どものことを考えていない親等、子どもとの関わり方が上手くいっていない ・地域とのつながりが希薄 ・TV ゲームが遊びの主流になり、人とのかかわりが不十分	・一人の子どもをみんなで見ていく
	19	・社会性の発達がゆっくり ・親の生活ペースに振り回され月曜日に元気がない	・環境すべて ・物が溢れ、人とかかわる力が弱くなっている ・大人の都合で子どもを振り回し疲れる	・ゆとりをもって子どもとかかわれる社会にする ・子どもの育ちの手本になるように
ＭＳ	20	・入園したての子どもでも、親が離れても平気等、新しい世界に動じない ・玩具にすぐに飽きる ・落ち着きがない ・プライドが高く頑固 ・他人を受け入れるのに時間 ・保育士を試す ・母性を求める子が増えた	・スピード化した社会の変化 ・親が受け入れなくても、物や場所―ゲームや習い事―がある ・お金と引き換えに心を失った	・子育ての中で何が大事か、まず親が考え、家庭で話し合う、そのために、子どもの実態に触れる話を聞く機会と足を運ぶ人が増えるネットワーク作り、 ・個々に対するアドバイス、ネットワーク作り
	21	・他児は声の限りに泣いて母親を求めているのに、壁にもたれ座り、無表情に部屋を見ている１歳児 ・心に十分な栄養をもらうことなく育ってしまった子どもたちが様々な問題を抱えている	・家庭での保護者のかかわり方保護者自身も大切なかかわりを経験せずに育ったのでは	・子どもに積極的にかかわり、十分な愛情という栄養を注ぐ ・保護者にも同様、十分かかわり、何でも話せる関係を築き、保護者にも心の栄養を注ぐ
	22	・好き嫌いがあり食べない ・落ち着きがない ・話が聞けない ・ことばが出ずジェスチャーで伝える ・突然泣いたり、ものを投げる ・表情が乏しい	・家庭環境 ・親自身の姿	・どんな親も子も受け入れ、共感する ・子どもを認め、一緒に遊び、楽しい時を過ごす
	23	・落ち着かない		・保育園など皆で育てていくという意識を持つこと
	23	・一見普通にみえても内面に問題をもっている	・便利になりすぎ、自己抑制が効かなくなった	・大人が子どもに歩み寄る ・戸惑う時は周りの人の援助を

			・親がきちんと判断して子どもに伝えず、人、物任せ	受ける
ＭＡ	24		・核家族化が進み、閉鎖的な家族、家庭の増加 ・少子化により過度の期待、ストレス、疲労 ・親子とも忙しい生活で心身ともに疲れている ・親が未熟で子どもの言動に一喜一憂 ・親が躾られず、人として大切なことが伝えられない ・社会の目まぐるしい変化でゆとりがなく、思考力低下	・過度な期待をかけない ・保育士は家庭で満たされない子どもの思いを受け止め、ひとりひとりとじっくりかかわる ・子育て支援の一環として年配者を活用し、支援する ・忙しい時間の中から子どもと関わる時間をつくる ・社会の悪い面を諦めず、少しでも変えていこうとする気持をもつ ・地域ぐるみで子育て支援し、かかわっていく
ＫＴ	25	・心がない遊び（ゲーム）に目を輝かす子ども	・ゲーム	
ＭＫ	26		・親の生活を中心にすると、子どもの生活全体に影響を及ぼす ・子どもが子どもを育てる状態	・園と家庭の連携
ＭＫ	26	・大人を含めて社会全体が病んでいる	・社会全体の一人一人の大人の心の中にある ・自己本位で、思いやりに欠ける大人がかかわる結果子どもに影響	
	27	・話が聞けない ・身体の使い方を知らない、身体に力が入らない ・ちょっとしたことで怒る ・気持の切り替えができない ・相手の気持を思いやれない ・基本的生活習慣が身についていない ・自信がもてない	・社会や家庭環境、親の考え方の変化	・親指導：親と話し合って同じ方向性で子どもにかかわる ・保育者は子ども一人一人と信頼関係を築き、友達と遊ぶ楽しさを味わわせる、体力づくりのための戸外遊びをさせる
ＭＴ	30	・家にいても楽しくない ・降園時、自宅より友達の家の方が良い	・親が幼い ・接し方がわからず、子どもの言いなり	・家族の一員として仕事をさせる ・仕事をさせ、ほめる ・一緒に料理
	32		・親が病んでいるため ・一人での遊びや一人での生活が多く、親も多忙で一家団欒の機会が少なくなり、「心の憩い」が失われつつある	・体験学習時の中学生に、保育者が子どもたちに優しく接する姿を見せる ・一人一人の子どもに、愛していることが伝わるようにしていく ・園児に十分スキンシップを図り、情緒を安定させ、健やかに育てていく ・大きくなった時に、愛されていたんだという思い出が残る

				ようにしていく ・親の気持を受け止めフォローする

① 病んでいるかどうかについて

「子どもたちは根は優しくて素直だと思います。私たち大人が疲れて病んでいるのではないでしょうか」という記述はあったが、「病んでいない」と明言した保育者は皆無であった。反対に、「病んでいる」と明言した記述も数名のみであったが、ほとんどの保育者が、病んでいる状態について記述しており、保育者たちは、子どもたちが病んだ状態にあると感じていると思われる。

子どもが病んでいる状態については、心身の発達が未熟、無表情、人とかかわれない、キレやすい、こどもらしくのびのびできない、大人を試す、意欲にかける、遊べない、自分を表現できない、落ち着かない、等の言葉が並べられている。また、「病んでいる子どもの数が増えたとは思わないが、病んでいる子はとことん病んでいるという状況にあるように思う。」「子どもが病んでいるというか、子どもの心が渇いているような気がします」との記述もあった。

「乳児専門保育園ということもあり、子どもが小さいため“病んでいる”とまでは思ったことがなかったが、小さいながらも園で話題になることは“子どもらしくない”“無気力”等といった事柄なので、“病んでいる”につながることになるのかなと考えさせられた。」
との記述もあった。

不登校、ニートといった言葉を挙げた保育者もいるが、大部分は就学前の子どもたちに当てはまる言葉で記述がなされており、ほとんどの保育者は、日頃自分たちが保育している年齢の子どもたちを念頭に置いて考えたことが伺える。

② 子どもが病む原因について

子どもが病む、子どもの側の原因については、子どもが乳児期に必要な経験をしないで育ってきたから、直接体験の減少、実体験の減少、人との関わりが不足している、我慢する経験が少なくなっている、両親と思い切り遊んだ経験が少ない、夜型の生活、等だからだとし、直接体験の減少、実体験の減少に関してはさらに、習い事にしばられているから、ゲーム機のためという、二次的原因が挙げられている。

子どもが病む、親の側の原因については、家庭に原因がある、親の愛情不足や知識のなさ、大人が育っていない、親になりきれない親が原因、親の都合で子育てをするから、親子関係に問題、親の異常な愛情の注ぎ方、親が子どもを自分のものとして扱う、親の幸せのはきちがえ、早くからの教育づくし、一人で子育てを抱え込む、子育てを保育所任せにする、母親の仕事の重要度が高くなっているから、等が挙げられ、子どもが乳児期に必要な経験をしないで育ってきたのは大人が疲れているから、大人社会が忙しすぎ、便利さを追及するからだと述べられている。

子どもが病んでいる原因について子どもの側の要因、親の側の要因に分けて言葉を並べたが、以上の記述からは、子どもが病むのは親の側に問題があると考えられていることがわかる。親が病んできたのは今までの社会やその親に原因がある、お金と引き換えに心を失ってしまった等の記述から、保育者は、親そして社会のしくみに原因を求めていることがわかる。

③ 対策について

以上のような子どもの現状に対して大人はなにをすべきなのであろうか。

親はまず子どもに耳を傾けるべきであると、親の問題として考えた記述もあった。しかし多くの記述は、保育者として子どもに対して何をなすべきか、保育者として保護者に対してなすべき事柄は何かについてであった。

保育者として子どもになすべき事柄としては、子どもの全てを丸ごとありのまま受け入れる、仲間作りで相手の気持に立って考えられる育ちを大切にする、いろんな経験をさせる、応答的に対応し、自分の思いを人に伝えること、人の思いを受け入れること、自分で考える力を身につけさせること、集団で過ごす楽しさを経験させ生活の中で

ルールを身につけさせる、自分のやりたい保育でなく子供の姿や思いを受け止めながら保育する、子どもの発達を把握し、経験すべきことが経験できる保育内容を考え、環境を整える、保育園時代に遊び込めるようにする等が挙げられていた。

保育者として保護者になすべき事柄としては、どのような親も子も受け入れる、保護者をねぎらいながら子どもの成長を喜び合える機会をもつ、親と話し合って同じ方向で子供にかかわる、おたよりで伝える内容を工夫する、子どもの良い点を伝え、ほめてもらう、一緒に育てようという姿勢を示す、皆で育てていくという意識を持つ、子育ての悩みを受け止めながら楽しさを伝える、親をどう支援するかを考える等が挙げられていた。

対子ども、対保護者以外の記述には、体験学習の中学生に保育士が子どもに優しく接する姿を見せる、年配者を活用、近隣社会との関係を蜜にする、保育所全員で対処する等があった。

子ども・保護者を越えた、もう少し広い枠組みからの記述として、子育ての中で何が大事かまず親が考え、家庭で話し合う、そのために子どもの実態にふれる話を聞く機会と足を運ぶ人が増えるネットワークづくりが必要である、社会全体の意識改革が必要、ゆとりをもって子どもとかかわれる世の中に、社会全体で子どもが子どもらしく生きることを考えるなどの記述がみられた。

これら少し広い視点からの記述は、主として経験年数20年以上の保育士たちにみられた。経験を積むことによって、保育士の役割のみでなく、保育所の役割についても日頃から考えるようになるということであろうか。

いずれにしろ、以上①②③から、保育者は子どもの病んでいる現状に対して、保育を司っている立場から思いをめぐらしたことがうかがえる。

（2）学生のレポートとの比較

昨年度の学生のレポートと今年度の保育者のレポートを比較すると、まず、病んでいるかどうかについて、学生の20パーセント弱は病んでいないと回答しているのに対して、現任保育士は、上記（1）①で述べたよう、ほとんど全員が病んでいると考えていることがわかった。

実習を通してこどもの状況を観察する学生と、日常的に、また何年かを通して継続的に子どもをみている保育者との違いであろうか。保育者たちが、日頃接している子どもたちの状況から、何かがおかしいと感じていることのあらわれであろう。経験年数20年の保育者は、子どもが変わってきたのはもちろんだが、変わるスピードがとても速くなってきていることを感じるとも述べている。

子どもが病んでいる原因について、学生たちは、病む原因は子どもの側にもないわけではないが、まわりの大人、特に親と環境に尽きると考え、子どもの側の原因として、子ども自身の心の弱さ、心のゆとりを失っている、愛されていない・必要とされていないと自分の存在を否定された気持になっている、安心感がもてない、寂しさ、無気力、忍耐力、適応力の弱さ、感情表現が上手くない、子ども自身の気質や性格、感情のコントロールができず他のものやヒトに矛先がむいてしまう、道徳観念の低下等をあげていた。

これに対して、日頃子どもを全面的に受容して保育しようとしている保育者は、子どもが病んでいる原因として、乳児期に必要な経験をしないで育ってきた、ゲーム機の普及等も挙げつつ、もっぱら大人、特に親、中でも母親の姿勢、スタンスに原因を求めている。

子どもが病んでいる状況への対策について学生たちは、親、大人そして社会を変えていくことの必要性を感じ、社会全体が子どものことをもっと学ぶことの必要性を指摘していた。

対策についての保育者たちの記述も、学生同様、親の姿勢を変えていくために保育士がどのようにすればよいのかについての記述が大きな割合を占めていた。

以上の比較から、学生も保育者も、主として乳幼児期の子どもを中心に考えて、程度の差はあるが、多くの子どもたちは現在望ましくない状態で生活せざるを得ないが、それは環境、特に親の姿勢に問題があるとし、親・大人社会を変えていく必要性を指摘していると考えられる。

Ⅲ　子育て中の親、主として母親の現状

それでは現在、乳幼児期の子どもをもつ親たちはどのような状態で子育てをしているのであろう

か。

子育ての状況を母親にアンケート調査した2冊の報告書を参考に考えたいと思う。

2冊の報告書は、『乳幼児の心身発達と環境―大阪レポートと精神医学的視点』[3]（以後「大阪レポート」と表記する。）と『子育ての変貌と次世代育成支援―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』[4]（以後「兵庫レポート」と表記する。）である。

前者は、大阪府A市で1980年1月～12月生まれの全数児約2000名を対象に、4か月児健診時、6か月児健診時、10ヶ月児健診時、1歳6か月児健診時、3歳6か月児健診時、小学校入学後健診時に実施された縦断的調査の結果である。

後者は兵庫県H市と大阪府I市（主として兵庫県H市）において2003年～2004年にかけて、4か月児検診時、10か月児検診時、1歳6か月児検診時、3歳児健診時に行われた横断的調査の結果である。

大阪レポートにおいては、クロス集計等により、子どもの心身発達は母親を中心とする養育環境に大きく影響されることが示唆されている。こどもを伸ばすかかわりは、例えば、天気の良い日には「よく外で」遊ばせている母親の子どもほど発達が良い、子どもによく話しかける母親の子どもは発達が良い等、従来から「良い子育て」と言われてきたものばかりであった。

また、母親の育児不安を招く要因として①母親が、子どもが何をもとめているのかがわからないこと　②母親の具体的心配事が多いこと、及びその未解決放置　③母親に出産以前の子どもとの接触経験や育児経験が不足していること　④夫の育児への参加・協力が得られないこと　⑤母親が地域で孤立していること、の5点があげられていた。

以上の大阪レポートの結果と、20年の歳月を経て同様の質問項目を用いて調査された兵庫レポートにおいて示された回答結果を照合することによって、子育てにおいて大切な親のかかわり方や親の意識の変化を読み取ることができる。

兵庫レポートにおいても、①赤ちゃん体操や「手にものを持たす」などのかかわりは子どもの発達に良い　②日光浴をさせたり、天気の良い日には「よく外で」遊ばせている母親の子どもは発達が良い　③子どもが一緒に遊ぶ友だちが多いほど発達が良い　④近所に話し相手がいるとか、子育て仲間がいる母親の子どもは発達が良い　⑤食事のとき、手づかみででも自分で食べられるようにしている母親の子どもは発達が良い　⑥子どもによく話しかける母親の子どもは発達が良い　⑦子どもの要求が理解できる母親ほど子どもの発達が良い　⑧母親の育児不安が少ないほど、また心配事が解消されているほど子どもの発達が良い　⑨こどもとのかかわりで迷ったり、自信がもてない母親の子どもは発達が悪い　⑩父親の育児への参加・協力は子どもの発達に良い　⑪育児の手本のある母親の子どもは発達が良い　⑫出産以前の子どもとの接触経験や育児経験がある母親の子どもは発達が良い　⑬睡眠と覚醒のリズムが決まっている子どもほど発達が良い　⑭テレビを見る時間が少ない子どもほど発達が良い等、子どもの発達と環境に関しては大阪レポートの結果を追認するものであった。

母親を取り巻く環境については、育児の伝承が途絶える中で母親たちは地域で孤立していて、自分のささやかな体験や思い込みで育児をせざるを得ない状態にあること、20年前に比べて夫は育児に協力的になっており、母親の実家とのつながりも密接になっていることがわかった。ここで、実家の支援の増加は望ましい側面もあるだろうが、近隣その他への広がりがみられないのは問題であろうと指摘されている。

大阪レポートで挙げられた育児不安の原因が改善されたかについては、改善されたのは④の夫の育児への参加・協力のみで、③の母親の出産以前の育児経験と⑤の地域での孤立はますます悪化していることがわかった。④の夫の参加・協力は協力的になってはいるが、一方で、非婚率の上昇や合計特殊出生率の低下等にあらわれているよう、結婚や子育てから降りてしまった青年たちがたくさんいるわけで、社会全体の子育てに対する共感の輪は必ずしも広がってはいないと分析されている。

ところで、育児不安という言葉が生み出されたのはすでに1980年代のことであり、このような母親のストレスを軽減するために、1990年代に入っ

て、さまざまな子育て支援策が採られてきた。各地で子育てサークルも自主的に立ち上げられ、多くの母親は育児ストレスを軽減できたはずである。しかしながら、ただちに支援が必要な母親は未だ救済できない状態ではないだろうか。

兵庫レポートでは、現代の母親の精神状態について以下のように述べられている。

「赤ちゃんと一緒にいると楽しいですかという問いに90%以上の母親が『はい』と答えており、多くの母親は精神的に健康であると考えられる。にもかかわらず、多くの母親が子育てでの心配や不安、子どもとのかかわり方での迷いや育児での自信の無さ、イライラ感や負担感等の精神的ストレスを訴えているのである。

そもそも子育ては多くの人が体験してきたことである。そのために子育て支援は簡単にできると考えられがちである。しかし現代の子育ては非常に困難になってきている。その原因は親が育ちの中で小さい子どもと触れ合う体験をしてこなかったこと、母親自身の人生の将来展望が開けていないことなどであり、いずれも日本社会のあり方が問われる問題である。」

Ⅳ　保育の動向と保育所保育指針の改定について

以上のように子育てがますます困難な状況になる中で、保育所には一体どのような役割が課せられるのであろうか。

昭和22年の児童福祉法の制定により児童福祉施設の一つとして誕生し、措置制度を背景に全国に普及した保育所は、1989年の合計特殊出生率1.57、1994年のエンゼルプラン、1997年の児童福祉法改正、2003年の次世代育成支援対策推進法といった時代の流れの中で、家庭や地域社会における養育環境や親の養育意識の変化などを背景に、女性の就労と子育ての両立支援および地域の子育て家庭に対する養育支援という２つの目的にそって、時代のニーズに応じた柔軟な保育サービスを展開することが求められるようになった。

そして今、わが国の保育所における保育の目標や方法等の基本を示す保育所保育指針の改訂が行われようとしている。平成12年の保育所保育指針第３次改訂以降の、次世代育成支援対策推進法に代表される児童福祉行政の展開等を踏まえての改訂である。

因みに、平成２年第１次改訂は、児童を取り巻く環境と児童自身の変化、乳児保育等保育需要の多様化、学問的研究・保育実践の進歩、幼稚園教育要領の改訂等、平成12年第２次改訂は、エンゼルプラン等多様化する保育ニーズに対する保育施策の実施、保育所における子育て相談・指導の実施、児童の権利条約の批准、幼稚園教育要領の改訂等による改訂であった。

保育を取り巻く環境の変化等を踏まえ、指針の構成や内容等について検討を行う必要があるとの目的で平成18年12月より平成19年７月まで13回の検討会が開催され、平成19年８月３日中間報告が出されたのである。今後更に内容を充実させることが必要な点について検討を進め、幼稚園教育要領の改定についての検討状況も踏まえつつ、本年中を目途に最終的な報告が取りまとめられる予定となっている。

今回の指針改訂の最大の見直しとして、各保育所の保育の内容の質を高める観点から保育所保育指針を告示とするという見直しがあるが、このことについては、子育て支援について考察するのが本稿の目的であるため、ここではふれないこととする。

改訂の経緯等については、平成19年８月に提出された中間報告における改訂の背景の項で以下のように述べられている。

「現行の『保育所保育指針』策定から７年余りが経過し、この間、子どもたちが家庭内や地域において人とかかわる経験が少なくなったり、生活リズムが乱れたりするなど、子どもの生活環境が変化してきている。また保護者についても、子育ての孤立化や子どもに関する理解の不足などから、不安や悩みを抱える保護者が増加し、養育力の低下が指摘されたりするなど、子育ての環境が変化してきている。このように、子どもの育ちをめぐる環境が大きく変化する中で、以下のように、保育所に期待される役割が深化・拡大している。

（１）乳幼児期は、子どもが生涯にわたる人間形成の基礎を培うきわめて重要な時期であり、家庭や地域の子育て力の低下が指摘される中で、保育

所における質の高い養護や教育の機能が求められている。特に、昨年12月に制定された教育基本法に幼児期の教育の振興が盛り込まれるなど、就学前の子どもに対する教育機能の充実が課題となっている。

（2）保育所に入所している子どもの保育とともに、その保護者に対し、就労状況や子どもとの関係等を踏まえた適切な支援、更には地域の子どもやその保護者に対する子育て支援を担う役割が一層高まっている。」

ここで（1）については、養護と教育が一体となって豊かな人間性を持った子どもを育成するという保育所保育の真髄に関わることがらであり、今後はさらに、養護と教育の概念が明確に理解された上で保育所の役割が遂行されることを意味すると考えられる。

（2）に関しては、次世代育成支援の推進のため、すべての家庭を対象とした「地域の子育て支援」の機能が保育所保育と並ぶ保育所の重要な機能として位置付けられるということである。平成12年の第 2 次改定においても、地域子育て支援の役割は明記されていたが、さらに進められ、保育所における同列の 2 つの重要な機能に据えられたことは注目すべきことである。今日の保育所の役割は保育所保育のみではない、また地域の子育て支援だけではない、両者をバランスよく担うことが求められているということである。

そして、中間報告の改訂の内容　（保育所の役割）において「保育所は、入所する子どもの健全な心身の発達を図ることを目的とする児童福祉施設であり、子どもの最善の利益を考慮し、その福祉を積極的に増進することに最もふさわしい生活の場でなければならない。こうした保育所の役割について、『保育所保育指針』に明確に位置付けることが必要である。その際、保育所は、その特性を生かし、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援、地域における子育て支援など保護者に対する支援等を行う役割を担っていることを明確化すべきである。」と述べられていて、現在直面する問題に対する保育所の役割が明確にうたわれている。

Ⅴ　これからの保育所の役割―まとめに代えて

以上のように、今日における保育所の役割が明文化され、保育所にはその子育て支援機能が発揮されることがますます期待されていると考えられる。

しかしながら、子育て支援とは、子育てという日常の営みに対する支援であり、その分、逆に困難さを抱えているとも考えられる。兵庫レポートでは「日本の専門職は子どもへのかかわり方については学んでいるが、『親を育てる』という点に関しては教育を受けていないし、技術ももちあわせていない。一見いかにも簡単なことのように思い勝ちだが、これほどむづかしい課題は今までどの専門職もかかわってこなかった」と危惧が述べられている。

これまで日常的、個別的、私的に営まれてきたことがらに対して保育所が手を差し伸べるということであり、難題ではあろう。確かに、保育所は集団保育の場であるが、保育所には、これまでの保育所の長い歴史の中で培われてきた、一人一人の子どもを大切にする保育のノウハウが蓄積されており、また近年は、子育て支援のノウハウも蓄積されているはずである。このことに関して、保育者との日頃の会話や、さまざまなレポートの文言から保育者の熱意は十分に感じられるし、保育の場で子育て支援をしようという意気込みも感じられる。

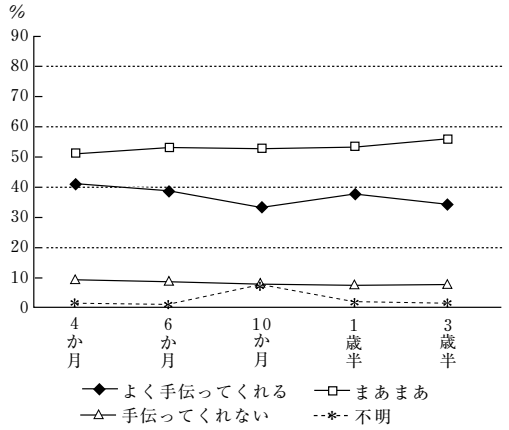
今回提出された保育者のレポートにも「自分の思いを吐き出す場が大人にも必要。その役割の一つが保育園であり、自分を見てくれる人がいるという安心感があることで、母親が安定し、子どもの気持の安定にもつながっていく。」、「今まで歪んできてしまった社会を元に戻すことは決して容易ではないが、これまで以上の時間と根気をかけて子どもや親の支援や育成をしていかなければならないと思う。」、「親が始めて子育てにかかわる機関に保健所、子育て支援センター、保育所、幼稚園がある。そこで個々に対するアドバイス、ネットワーク作りが大事」、「今私たち保育士にできることは、子ども自身に対して積極的にかかわり、十分に愛情という栄養を注いでいくこと。それと同様に保護者にも十分なかかわりを持ち、何でも話せる関係を築いていく中で、心の栄養を注

いでいくこと」、「私たちの仕事は社会的な危機に接点があり、子どもを育てるというだけでなく、親も共に育てていくという任務があると思う。力を尽くしたい」等の記述がみられた。

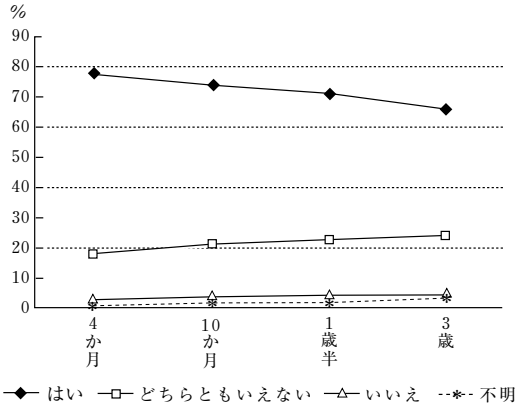
以上のような熱意や意気込みを全うするために、今後保育者には、明確化された社会的責任の遂行にむけた体系的・計画的な研修や自己研鑽を通じて、自己の資質向上と職員集団の専門性の向上を図り、責務を遂行することが求められるだろう。

そして保育所には、次世代育成支援行動計画を推進する役割をもった、地域の特性を活かして、地域の保育水準をあげようとする、時代を先取りした保育所づくりが求められることになるだろう。

このように保育所への期待がますます増大する今日、保育や子育て支援の中心的な担い手である保育者は多大な職務を遂行しなければならない。そのためには、一人一人の保育者のみの力には当然限界があるはずで、まわりの有形無形の資源を活用することになるだろう。このような保育者を様々な方法でサポートすることは、我々保育者養成校教員にも課せられた役割であろう。そして、近い将来、保育や子育て支援の中心的な担い手になるであろう質の高い保育者を育成することは、我々保育者養成校教員に課せられた役割であることは言うまでもない。



お父さんは育児をよく手伝ってくれますか―大阪レポート
（原田、2006）



お父さんは育児に協力的ですか―兵庫レポート
（原田、2006）

ところで、兵庫レポートでも述べられたよう、近年の若い父親の意識そのものはかなり変化してきている。変化の様子を図に示しておく。

わが国では、子育ての大部分を母親が担っている現状から、子育て支援の多くが、実質的には母親を対象とした支援である感は否めない。しかし、兵庫レポートのクロス集計に示されているよう、父親の育児参加を支えることは、同時に母親の負担と不安を軽減する支援にもなりうるのである。父親の育児参加を一時的な現象で終わらせないためには、これからの子育て支援の中に、父親支援をいかに位置づけるかも重要な課題であろう。子育てにおける父親の役割についての社会の認識を改め、父親支援を進めるためには、例えば、育児における父親の役割は、ただ単に育児を母親と父親とで分担するということだけではなく、父親独自の役割があるはずであり、これらについての研究を積み上げ、子どもの発達にとっての父親・母親の役割を解明する必要があると考えられる。

これらの、子育てにかかわる条件整備を進めることは、次世代を育成し、専門性をサポートする立場にいる研究者、養成校教員である我々に課せられた任務と言えるのではないだろうか。そして、社会全体の意識を少しずつでも変えて行き、子育て、次世代育成が大人にとって必須の重要課題であるという認識を広めていかなければならないと思う。

【注】

⑴　拙稿　2006　子どもの現状と次世代育成について　名古屋柳城短期大学研究紀要第 28 号　43 － 59

⑵　愛知県では、2002(平成 14) 年度より、県内国公立を除く私立保育士養成所が参加する「愛知県現任研修運営協議会」に委託して、現職の保育者を対象にした研修が行われている。保育士の指導者を養成するための愛知県独自の制度である。

⑶　服部祥子・原田正文　1991　乳幼児の心身発達と環境―大阪レポートと精神医学的視点　名古屋大学出版会

⑷　原田正文　2006 子育ての変貌と次世代育成支援―兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防　名古屋大学出版会

⑸　社団法人全国保育士養成協議会現代保育研究所　就学前の保育の今後の方向性を考える～保育所保育指針検討の中で～　平成 19 年度第一回現代保育研究所研修会―資料編―

【参考文献】

厚生省児童家庭局　1998　児童福祉五十年の歩み

大日向雅美　2005 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない　岩波書店

全国保育団体連絡会･保育研究所（編集）　2006　保育白書 2006 年版　ひとなる書房

全国保育団体連絡会･保育研究所（編集）　2007　保育白書 2007 年版　ひとなる書房

全国保育協議会編　2006　保育年報【2006】保育所が進める次世代育成支援　全国社会福祉協議会

Japanese Children Today and the Importance of Bringing up the Next Generation

Narita, Tomoko*

現在、子どもが病んでいると言われるが、子どもたちは本当に病んでいるのだろうか。以上の問いに対して得られた保育者からの回答を、昨年度行った学生の回答と比較しながら分析した。保育者たちは、子どもたちが病むのは、環境、特に親の姿勢に問題があり、親・大人社会を変えていくことが必要であると指摘していた。２冊の調査報告書―大阪レポート、兵庫レポート―により、ここ20年で父親の育児への参加・協力度は改善されたが、母親の出産以前の育児経験はより少なくなり、地域ではますます孤立しているという、子育て中の親の現状を示した。これら子育ての現状に対して、保育所保育と地域の子育て支援を保育所における同列の２つの重要な機能に据えた保育所保育指針の改訂についての中間報告を読み解き、これからの保育所の役割について考察し、さらに保育士養成校教員の役割についても考察を加えた。

キーワード：子どもが病んでいる，次世代育成，保育所保育指針の改訂，保育所の役割

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*